一
岡本綺堂作
維新前後
川上革新劇
第一回興行

明治
六 9 29
内務

はしがき

[illegible]

ア2-2-2-1

前篇　奇兵隊

登場人名

高槻新作
櫻井多門
前原彦次郎
平家蟹の五郎蔵
櫻井の僕浅吉
材木商人才兵衛
實は徳川の隠密
先鋒隊の若侍

藪子梅松
同菊葉
舞子若駒
櫻井母久子
狂女お菊
五郎蔵女房お浪
同悴長吉
他に女中、踊子等

後篇　白虎隊

登場人物名

[illegible]小左衛門
同　七之助
白河　千太郎
同　萬次郎
朝日[illegible]政五郎
前原彦次郎
白虎隊士数名

[illegible]番人作兵衛
作兵衛娘お若
白河娘鶴代
同下女お松
佐藤源之助
西田新七
他に兵士、町人等

脚本

維新前後

前編　奇兵隊

岡本綺堂

上の巻　湯田村

山口在、湯田村の温泉宿、瓦屋の奥座敷。二重屋體にて、床の間、違ひ棚等あり。庭には松、紅葉等の立木。元治元年九月廿五日の午頃。

材木商人才兵衛、實は徳川の隠密、商人の服装にて座蒲團を敷き、酒肴を列べ、藝子菊榮は三味線を弾き、舞子若駒は扇を持ちて踊りゐる。やがて踊り了れば、才兵衛は手を拍つて、

才兵衛「や、や。豪いもんや。先づ一杯上げうか喃。

と杯を若駒に献し、

オ兵「わしは岩國へ材木を買ひ出しに來た者で、序に此地へ寄つたのやが、山口は却々好え所喃。

菊栄「御意に入りましたら、ゆる〳〵御逗留なされませ。

オ兵「わしは最う一生こゝに居りたいと思ふのやけれど、然うもならんで喃。はゝゝゝ。

衛「時に梅松は先刻から顔を見せんな。

若駒「御贔負の梅松さんが見えないので、大層御心配でございますね。

オ兵「花代を此方に拂はせて置きながら、好きな男と逢引でもしてゐるのや無いか。わしは

衛「豪い阿房者やな。

藝子梅松、廿一二歳。浮かぬ顔して奥より出づ。

菊栄「お待兼の梅松さんが見えました。

梅松「先刻から何だか氣分が悪く、彼方の座敷で横になつてゐたので、皆さん、どうも濟みませんでした。

オ兵「いや、濟むも濟まんもない。お前が顔さへ見せて呉れたら其れで可えのや。さあ、約

束ぢや。これから雪舟庵の紅葉なと觀に行かうか。

梅松「折角でございますが、今も云ふ通り、少し氣分が悪いので……。

オ兵「はて、それも漫々歩けば屹と癒る。さあ、行つた、行つた。

衛「酒に醉ひたる體にて起上る。下手の庭口より宿の女中出で來り、梅松を縁先へ呼び出して何事をか囁く。梅松は眉を顰めて、

梅松「では、跡で逢ひますから、少し待して置いて下さい。

女中は首肯きて去る。梅松、座に復りて、

梅松「下の關から兄が尋ねて來たと申しますから、誠に勝手らしうございますが、どうぞ一足お先へ願ひます。

オ兵「兄が來たと云ふて、そりや眞實の兄かな。

衛「あなたもまあ疑惑深い。梅松さんの兄さんは有名の惡……。

菊栄「又いつもの事でございませうね。

と云ひかけて、梅松を顧り、

金の無心であらうと云ふ心にて對手の顔を視る。

梅松「菊榮さん、察して下さい。

と俯向く。才兵衛首肯きて、

才兵衛「では、仕方無いから、梅松だけこゝに殘して、わし等三人で出掛けうか。

菊榮「さあ、お伴いたしませう。

若駒「姐さん、お先へ。

と梅松に挨拶して、才兵衛を先に、菊榮、若駒等は捨臺詞にて奥へ入る。梅松うつむきて思案の體。庭口より下の關の船頭、平家蟹の五郎藏、三十二三歳。脚袢、草鞋、手に菅笠を持ちて出で、

五郎藏「おい、おい、いつまで俺を待して置くのだ。錢湯小路の家へ尋ねて行つたら、この溫泉宿に出てゐるといふ咄だから、直に此方へ廻つて來たのだ。と云つたら、用の筋も大抵讀めたらう。何日も〳〵氣の毒だが、來月は八幡樣のお祭で、子供に揃の一枚も買つて遣りたし、まだ他にも種々都合があるから、何分頼むせ。

無心を云ひながら、緡に腰をかける。

梅松「お氣の毒とは此方で云ふ事で、お氣の毒ですが今日は些とも都合が能ませんから、惡く思つて下さるな。

五郎藏「何も然う不愛嬌に突ッ跳るものぢやアねえ。これでも可哀想に下の關から、旅をかけてわざ〳〵來たのだ。後生だから幾許握つて歸らして呉れ。それが兄弟の好誼と云ふものだ。

梅松「兄弟の好誼といふ事を知つてゐるなら、さう度々無心に來られた義理ぢやアありますまい。何を云つて來ても取合つて呉れるなと、姉さんからも頼まれてゐます。お世辭の無い所、お前さんには最う愛想が竭きましたよ。

五郎藏、勃然として、

五郎藏「だから、斯うして謝つて頼んでゐるのだ。それが手前にやア解らねえか。現在血を分けた阿兄さんに對つて、愛想が竭きたとは何の口で云ふのだ。つまらねえ事を自慢にする樣だが、下の關から向地の大里へ乘切る船頭社會でも、人に知られた平家蟹の五郎藏だ。多寡が女に云ひ籠められて、むゝ然うかと指を咬へちやア歸られねえぞ。

梅松「歸られなければ何うするのです。

五郎藏「懲戒の爲に斯うして遣るのだ。

妹の襟髪を捉つて引据ゆれば、

梅松「いくら兄さんでも、默つて撲れちやアねませんよ。

五郎藏「口の減らねえ事を云ふな。罰中り奴。

拳をあげて撲たんとす。この以前より長州藩士高槻新作、廿六歳。黑木綿の袷、小倉の袴、朱鞘の長き大小。奥の襖をあけて窺ひゐたりしが、斯時つか〳〵出で來りて、

新作「これ、これ、それは私が大事の情婦ぢや。手暴い事をするな。

五郎藏「驚きて手を止め、新作をぢろ〳〵視て、

五郎藏「私が情婦と名乘つて出たのは……。むゝ、それぢやアお前さんが噂に聞いた高槻さんでございますかえ。

新作「むゝ、わしは高槻新作。大略の樣子はあれで聽いて居つたが、究竟は此の梅松に金を貸せと云ふのだな。兄弟泣せも好加減にしろ。貴樣達に貸す金があれば、鑄潰して大砲でも造るわ。

五郎藏「え。

新作「はゝゝゝ。さう驚くな。金は今貸して與る。併し私は斯通りの貧乏人ぢやから、到底大金は貸されぬぞ。紙入の底を掃いて先づ斯んなものぢや。

紙入より金二兩出して梅松に渡す。梅松、頂きて紙につゝみ、

梅松「折角の思召ですから頂戴します。兄さん、よくお禮をお云ひなさいよ。

五郎藏うけ取りて中を檢め、

五郎藏「下の關から旅費を遣つて來て、こんな事ぢやア割に合ねえが、旦那のお捌だ、仕方がねえ。ありがたく頂いて置きませうよ。(と懷中に收め)御覽の通りの濱育ちで、何分氣が暴えもんですから、こんな所へまで來て亂暴をして、誠に申譯がございません。

新作「亂暴は可い。わしも亂暴は大好ぢや。併し貴樣は惡黨で不可な。

五郎藏「へえ。と頭を掻く。

新作「同じ亂暴を働くなら、善人になつて亂暴を働け。善い事なら何んな亂暴をしても構はぬ。温順くしてゐたら此の日本國が潰れるぞ。今の世の中は亂暴者の時代ぢや。

五郎藏「へえ。

少しく煙にまかれたる形にて、新作の顏を凝視める。

新作「わしも是から益々亂暴を行る意ぢやが、貴樣達のやうな惡い事は爲んぞ。貴樣も根性を入替へて、先づ善人になつた上で、勝手次第に亂暴を爲ろ。どうぢや、解つたか。

五郎藏「解りました。成程こりやア理屈ですね。

新作「貴樣も却々咄せる男ぢやな。こゝで一杯飲んで行け。

五郎藏「有難うございますが、少し道中を急ぎますから、これで最うお暇いたしませう。

新作「貰ふ物さへ貰へば、用は無いと云ふのか。はゝゝゝ。可いから、歸れ。

五郎藏「おい。(と梅松に對ひ)お前から能く旦那にお禮を申して呉れ。ちやア、御免下さいまし。

一禮して下手へ入る。梅松、跡を見送り、

梅松「ほんとうに飛んだ御迷惑をかけました。

新作「まあ、可いわ。彼奴惡黨ぢやが、役に立ちさうな男ぢや。彼の妹では、お前も惡黨ぢやらうな。

梅松「さうかも知れません。それだから貴下に惚れたのでせうよ。

新作「むゝ、面白い。そこで、わしも惚れたのぢや。

この時、奥の襖をあけて、櫻井多門、三十歳。惣髮の茶筌、羽織、袴、大小にて出で、

多門「高槻ばかりで無い。私も惚れて居るぞ。油斷するな。はゝゝゝ。

新作「おゝ、櫻井か。

梅松「よくお出でした。

四邊に取散したる酒肴など片附ける。

新作「酒を早う持つて來いと云へ。

多門「いや、酒など飲んでは居られぬ。今日は政事堂で御前會議ぢや。

新作「成程、わが黨に取つては大事の日ぢや喃。そこで、櫻井。どうぢや、勝利の成算があるか。

多門「さあ。(と考へて)私とても敢て恭順に反對と云うでは無い。恭順固より結構ぢやが、扨其條件ぢやて……。

新作「たとひ何の樣な條件でも、今更德川に降參が能るものか。恭順固より結構なゝ、貴公も例の俗論に化れたか。

少しく屹となつて詰め寄る。多門、冷笑ひて、

多門「馬鹿を云ふな。豫て貴公等とも談じた通り、此際徳川幕府に對して、好んで戦を挑むにも及ばぬ。さりとて又、いかなる屈辱を忍んでも和睦せいなどゝ卑怯な事は云はぬ。幕府が我々の心事を諒として、無事に局を結ぶとあれば、我々尋常に恭順の意を表するが、彼の俗論一派が唱ふる如き、領地を削るの、君公を廢するのと云ふ條件附では、われ〳〵到底承知は能ぬ。天下を敵とし、防長二ヶ國の運命を賭しても、最後まで戦はねばなるまい。わしの意見は先づ斯うぢや。

新作「むゝ。(と腕を拱みて)いや、いかにも貴公の云ふ通りぢや。今更思へば京都蛤御門の一件、續いて夷國船攻撃、悉く失策の基であつた喃。

多門「過激一點張の貴公等も、少しく眼が醒めたかな。

新作「併し既往は咎めずぢや。もう斯うなつたら飽までも俗論を排して、お家の危急を救ふ手段が肝要ぢやぞ。お家のお爲は即ち朝廷のお爲で、長州のお家が一朝亡びた曉には、誰か勤王の魁となつて、天下に大義を唱ふる者があらう。それに付けても今日の御前會議は、お家の運命を決すべき大事の評議ぢや。櫻井、確乎遣つて呉れ。

多門「むゝ。そこで、萬一わしの意見が行はれぬ時には、又何とか臨機の工夫もあらう。奇兵隊の若い者共が無闇に立ち騒がぬ樣に、貴公から注意して呉れ。實は其れを頼みに寄つたのぢや。

新作「本來ならば、私が先立で騒ぐ方ぢやが、今日の所は虫を抑へて居らうよ。

庭口より櫻井の僕淺吉、廿五六歳。主人の草履を持ちて出で、

淺吉「旦那さま。もう御出仕の刻限でござりませう。

多門「おゝ。(と起上りて)では、高槻。

新作「煩い樣ぢやが、確乎頼むぞ。淺吉、この時節ぢやから、よく氣をつけて伴をしろ。

淺吉「かしこまりました。

と草履を直す。多門、庭に降りる。

多門「けふの評議の模樣次第で、又何の樣な事が出來すまいとも限らぬ。けふは大事の日ぢや。梅松、高槻を餘り酔はして呉れるな。

梅松「それは好く心得て居ります。

多門は淺吉を連れて下手へ入る。

新作「此頃は何うも懊悩してならぬ。梅松、酒を持つて來い。

梅松「でも、櫻井さんが彼の通り心配して被在ッたではございませんか。

新作「櫻井は櫻井、私は私ぢや。酒を浴びるか、血を浴びるか、何方にかせぬと胸が晴れぬわ。まあ、可いから早う持つて來いよ。

梅松、餘儀なく起たんとす。下手より前原彦次郎、廿四五歳。大小、袴、高下駄にて出で、

彦次郎「高槻、もう酒は止せよ。

新作「おゝ、前原か。貴公は相變らず野暮ぢやな。そんな事では女が惚れぬぞ。

彦次郎、座敷に上りて、

彦次郎「女子には惚れられんでも可い。私には自分の方から命賭で惚れた者がある。

新作「貴公が命賭で惚れたと云ふのは……、むゝ、京都ぢやな。

彦次郎「蛤御門の一件以來、あちら樣では大分嫌うてござる樣ぢやが、此方では却々思ひ切られぬぞ。

新作「惡女の深情かな。併し京都の御方には私も惚れた。惚れたればこそ命をも投げ出して

勤王などゝ狂ひ廻るのぢや。

梅松「では、妾に惚れたと云つたのは嘘ですか。

新作「いや、お前にも惚れた。併し京都といふ大切な情婦には代へられぬ喃。

この時、下手にて唄の聲聞ゆ。

唄「夏の葵は世に捨られて、菊の花さく秋が來る。

新作「前原。あれを聽いたか。夏の葵は世に捨られて、菊の花さく秋が來る。

彦次郎「むゝ。(と考へて)葵は江戸、菊は京都の御紋。何やら意ありげな唄ぢや喃。

と兩人顔を見合せる。

梅松「あれは又例の狂女でござんせう。

新作「おゝ、狂女か。

庭口より狂女お菊、十七八歳の美しき娘、町家の風俗。白菊の花と馬の沓を持ちて走り出づ。後より宿の女中、追つて出で、

女中「あゝ、もし、もし、そちらのお座敷へ行つてはなりません。

制すれどもお菊肯かず、縁の前につかゝ歩み來る。女中は持餘して、

女中「どうも誠に相濟みません。何をいふにも此の通りの始末で……。

梅松「いえ、いえ、御心配なさるな。當人の氣の濟むやうに、斯うして置くが可うござんせう。

女中「でも、皆さんのお邪魔になりますから……。

梅松「わたしが好い樣に宥めて歸しますから、構はずにお置きなさいよ。

女中「それでは何うぞ宜しく願ひます。（とお菊に對ひ）お前さん、溫順くしてお在なさいよ。

お菊、小兒のやうに首肯きて土にぺッたり坐る。女中は一同に會釋して去る。

新作「これが入江のか。

梅「ほんとうに可哀さうですよ。

彦次郎「入江が何うした。

新作「これは米屋町で資産家といふ長門屋の娘ぢやが、不圖した事から彼の入江の彌三郎と戀仲になつた。ところが、入江は此の七月、蛤御門で見事に討死、其噂を聽いて取逆上たのであらう。俄に斯樣に狂ひ出したのぢや。

梅松「それから後は悲しい唄を歌ひながら、夜も晝も其處らを迷つてゐるので、今では米屋

町の狂女と云へば、こゝらで誰も知らない者はありませんよ。

彦次郎「それは不憫の者ぢや。入江も飛んだ罪を作つたな。

お菊、屹と顏をあげて、

お菊「入江樣に罪は無い。罪を作つたは江戸の鬼ぢや、會津の惡魔ぢや。

新作「おゝ、道理ぢや、道理ぢや。

と庭下駄を穿きて、庭に降立ち、

新作「これ、娘、お前は面白い唄を歌うて居つたな。夏の葵は世に捨らるゝか。

お菊「この通りぢや。

馬の沓を地に拋つ。

彦次郎「菊は花咲くか。

お菊「この通りぢや。

菊の花を出して見せる。

新作「然うか、さうか。お前の恨んで居る江戸も會津も、鬼も惡魔も、今に私が亡して遣るから、待つて居れ。

優しく云ふ。お菊、頭を掉つて、

お菊「いえ、いえ、お前は頼まぬ。妾一人で澤山ぢや。

梅松「あの、お前一人で……。

お菊「おゝ、殘らず咀ひ殺して遣るのぢや。

彦次「江戸も會津も咀ひ殺すか、面白い事を云ふぞ。

新作「咀へ、咀へ。命をかけて仇を咀へ。咀ひ殺して、肉を喫へ、血を啜れ。人の一念は凄じいものぢや。名も無き少女の呪咀に因つて、德川や會津の天下が仆れぬとも限るまい。

彦次「狂女は其女子ばかりで無い。われ〳〵も同じ狂人仲間ぢや。

新作「差づめ我が奇兵隊などは、狂人の間屋であらうよ。眞人間になれば俗論黨ぢや。矢はり狂人の方が優かも知れぬ。

この時、上手の庭口より以前の才兵衛、酒に醉ひたる體にて藝子菊榮の肩にかゝり後より舞子若駒附添ひ出で、

菊榮「あなた、お危なうござんすよ。

才兵衛「何、大丈夫ぢや。

と跟蹌きながら來りて、

才兵衛「や、私が借切の座敷へ挨拶も無しに踏込んだは、何處の何奴ぢやい。

新作の袖を掴む。梅松駈け降りて止める。新作、勃然としたる體にて才兵衛を突き放す。才兵衛ばッたり倒れて、

才兵衛「さあ、料見ならぬぞ、料見ならぬぞ。

と喚く。藝子等は寄つて宥める。

新作「馬鹿め。(と冷笑ひて)前原、座敷を替へて嘶さうか。

彦次「むゝ。

新作を先に彦二郎も下手へ行く。

【幕】

中の巻　袖付橋

山口城下、譏井町袖付橋の袂。上手より奥へかけて石橋あり、向ふは芋畑を隔てゝ湯田村の人家の灯遠く見ゆ。九月廿五日の闇き夜。

先鋒隊(所謂俗論黨)の若武士二人。大小、袴、高下駄にて、石橋を渡り來る。

甲「もう彼是五つであらうな。御前會議は疾に果てた筈ぢやが、櫻井奴、まだ退らぬか。

乙「兎角に我黨の邪魔するは櫻井高槻の徒ぢや。殊に櫻井めは、今日の會議の席で、盛に恭順反對の議論を吐いたとか聞くぞ。

甲「何の道、捨置かれぬ奴ぢや。歸途を待つて殺つて了へ。

乙「むゝ。

兩人謀し合せて小蔭に忍ぶ。時の鐘。向ふより淺吉は提灯を持ち、後より櫻井多門出づ。

淺吉「今晩は大分暗い事でござります。

多門「おゝ、氣をつけて行け。

甲乙兩人は背後より窺ひ出で、

甲「誰か。

と聲をかける。多門徐に顧りて、

多門「櫻井多門。

其詞未だ了らざるに、甲乙は身構へして、一人は淺吉の提灯を叩き落し、一人は背後より多門の脚を掬つて俯らす。

多門「何者ぢや。

甲乙答へず、刀を拔いて撃つ。多門は倒れて又起ち、闇中の亂闘。この刹那に舞臺忽ち闇くなりて何物をも辨せず。

舞臺再び明るくなれば、甲乙の姿は見えず。多門は朱に染みて中央に倒れ、其左右に母久子と淺吉あり。淺吉は附近の農家より借來りし手桶の水を多門の口に注ぎて

淺吉「旦那様、確乎なされませ。

久子「これ、多門。母はこゝに居りますぞ。解りますか。

と提灯の火を差付る。多門僅に首肯く。高槻新作、押取刀にて橋を渡り來つ、手負

の側に走り寄りて、

新作「櫻井、斬られたな。而て、對手は誰ぢや。

淺吉「確に二人とは察しましたが、何分にも此の闇黑で……。

新作「むゝ、解らんか。無論、彼の俗論黨の所業であらう。憎い奴等め。彼等に先を越されたか。

と向ふを睨んで、更に多門の耳に口を寄せ、

新作「櫻井、さぞ殘念ぢやらうが、是も御國の爲、御家の爲ぢや、甘じて革命の犧牲になれ。

多門首肯きながら苦痛の體にて我首を指し、

多門「た、たのむ。

新作「むゝ、介錯を賴むと云ふか。これほどの疵では所詮助かるまい。希望の通り、立派に介錯して遣るぞ。

刀を拔けば、淺吉驚き、

淺吉「只今醫者も來る筈でございます。まあお待ち下さりませ。

新作「えゝ、藪醫者が來たとて今更何とならう。長く苦痛を見せるよりも、一思ひに擊果すが却つて情ぢや。

刀を振上れば、久子は支へて、

久子「高槻さん、待つて下され。

新作「あなたまでがお止なさるか。未練でござりませうぞ。

久子「成程未練でもあらう、卑怯でもござらう。高槻さん、あなたは未だお若いに依て、子の可愛さを能く御存知あるまい。五年三年の長煩ひに、所詮癒らぬ病人と、人が見放しても醫者を賴み、醫者が見放しても神佛を賴み、賴まれぬ者までも賴みにして、萬に一つの希望を維ぐ、それが世間の親心。況て是は今朝までも達者な體、傷さへ癒れば命は有る。過つた事して下さるな。

新作「でも、この疵が癒りませうか。

久子「癒る癒らぬは運次第、癒らねば天命、是非もござらぬ。十に九つは助からぬと、覺悟は爲ながらも猶迷ふ、親の心を察しもせず、何うでも介錯と云はるゝなら、この母の身は悴の楯ぢや。楯諸共に斬つて下され。

我子を掩ひて云ふ。新作は感に堪へず、刀を捨てゝ土に坐し、

新作「流石は櫻井の母御ぢや。好う云はれた。私は此の通り荒氣の生れ、猪武者で押通して來たが、今のお詞は胆に堪へた。當人の希望とは云ひながら、介錯などゝ過つたは私の疎忽ぢや。赦して下され、謝りました。成程、子は可愛いものでござりませう喃。思はず眼を拭へば、久子は四邊を見廻して、

久子「それに付けても貴下に申す事がある。今は俗論黨が時を得て、幕府に逆らふ人々は、風に向ふ燈火とも云ふべき運命、眼の前に倒れてゐる此の悴が好い手本ぢや。貴下にも親御がある、斯ういふ所に長居して、無益に命を失うては、君には不忠、親には不孝。何處へか一旦身を隱して、時節をお待なさるが可いぞ。

新作「むゝ。

と考へてゐる。橋を渡りて藝子梅松走り來り。

梅松「櫻井さんが斬られたとは、何うなされたのでございます。

淺吉「いづれ俗論黨の所業に決つてゐるが、闇討とは卑怯な奴等だ。

梅松「ほんとうにお武士らしくも無い、卑怯な人達でござんすねえ。

附近の農夫二人、畚と天秤棒を擔ぎて出で、

甲「どうも遲くなりました。

乙「直に擔いでまゐりますか。

久子「おゝ、些とも早いが可い。

淺吉手傳ひて、多門を畚に入れる。新作漸く顏をあげて、

新作「では、私も一緒に……。

と起つを制して、

久子「いや、いや、送つて下さるには及ばぬ。今も申した通り、あなたは一刻も早う……。

新作「でも、このまゝに見捨てゝは。

久子「はて、悴の事はお構ひなさるな。悴を拯ふは母の役、天下を拯ふは貴下の役ぢや。好う考へて見なされ。

と起ち上る。淺吉は農夫に對ひ、

淺吉「餘り搖れぬ樣に徐に擔いで行け。

甲乙「かしこまりました。

と畚を擔ぎ、久子、淺吉附添ひて橋を渡り行く。新作と梅松は後を見送りて、

梅松「櫻井さんは飛だ御災難でござんしたねえ。

新作「櫻井の一身ばかりで無く、わが黨の爲には大いなる災難ぢやが、今は是非も無い。母御の意見に隨つて、一先づこゝを立退かうか。

梅松「而て、あなたの行く先は。

新作「先づ九州へ落つるより他はあるまい。うか〳〵して居つたら櫻井の二の舞ぢや。

梅松「幸ひ妾の兄さんは、下の關の船乘でござんすから、仔細を噺して向地へ隱然渡して貰ひませう。

新作「成ほど、好う氣が注いた。あの五郎藏とやらは骨のありさうな奴。惡に强きは善にもちや。打明けて賴んだら背て呉れぬ事もあるまい。

兩人、空を仰ぎて、

新作「おゝ、何時の間にか星が出た。

梅松「この星明を賴りにして。

新作「早く行かうか。

兩人は下手へ行かんとする時、狂女お菊、何處よりか迷ひ來りて、新作に行き當る。

新作透し視て、其まゝ花道へ行く。上手の橋を渡りて、以前の先鋒隊の若武士一人、短銃を持ちて窺ひ出で、新作の方へ筒を向ける。お菊、つか〳〵と寄つて武士に飛び付く。其機に狙は狂うて空を擊つ。梅松、響に驚きて新作に縋れば、新作其手を取りて足早に向ふへ入る。侍は殘念だと云ふ體にて後を見送る。お菊は『ほゝゝゝほゝ』と高く笑ふ。

【幕】

下の巻　下の關海濱

下の關海濱、船乘五郎藏の宅。二重屋體にて、破れし壁に簑笠をかけ、櫂など立掛けてあり。下手には丸太の門口ありて、軒に紅き提灯を吊りたり。外は砂地にて、海近く見ゆ。十月十五日の午下。龜山八幡の祭禮にて、囃子の音遠く聞ゆ。

藝子梅松は素人風に扮裝ちて、圍爐裏に粗朶を折燔べてゐる處へ、五郎藏の女房お浪、廿七八歳。結び髪、筒袖の半纏、藁草履にて、十歳ばかりになる悴長吉の手を曳きて歸り來る。長吉は祭禮の揃衣を着たり。

長吉「今歸りました。

梅松「おゝ、大層早うござんしたね。

お浪「母子は内に入りて、

お浪「御參詣を濟したら、成たけ早く戻らうと思うたなれど、何を云ふにも雜沓で、つひつひ遲くなりました。

梅松「八幡樣のお祭は相變らず賑かでござんしたか。

長吉「去年よりも大變立派に出來ました。ねえ、阿母さん。

お浪「龜山八幡樣のお祭は、毎年九月の十五日と決つてゐますが、今年は八月の黒船騷ぎで、一月延して十月のお祭。惡魔攘ひの世直しぢやと云うで、氏子中は大張込、例に無い練物なども澤山出來ました。お前さんも世を忍ぶ身で無くば、見せて遣りたいものぢやが……。而て、留守の間には誰も來ませなんだか。

梅松「成べく他人には顏を合さぬやうに、用心してゐましたが、幸ひに誰も見えませんでした。端近く出てゐては惡いと知りながら、せめて姉さんの留守の間に、お湯でも沸して置かうと思ひまして……。

お浪「それは御苦勞でござんした。ぢやが、高槻樣もお前さんも、滅多に油斷のならぬ身の上。餘りに端近う出てゐては、身に泌む冬の浦風よりも、浮世の風が怖うござるぞ。どれ、妾が焚付けませう。

お浪は圍爐裏に向ふ。下手より材木商人才兵衛、脚袢草鞋の旅姿にて出で、門口に立て内を窺ひ、つか〳〵入り來りて、

才兵衛「些とお尋ねしたい事があるのやが……。

と突然に云ふ。梅松慌てゝ顔を隠す。お浪も驚きて、

お浪「えゝ、誰やら知らぬが無躾な人、案内も無しに踏込んで……。

才兵衛「いや、これは是は私が疎匆ぢや。料見して下され。船頭衆のお宅と見て、お尋ね申しに來たのぢやが、この下の關から大里へ越す船は、何時頃に出ませうな。

長吉「今日は八幡様のお祭で、漁も船も休みですよ。

才兵衛「おゝ、左様か。それでは又一日、宿屋の奥に寢釋迦ぢやな。難儀な事喃。

吐きながら猶も家中をきよろ〳〵見て、

才兵衛「や、お前は梅松や無いか。おゝ、梅松ぢや、梅松ぢや。山口の藝子が何うしてこゝへ……。こりや不思議の御對面ぢやな。はゝゝゝゝ。

竹縁に腰を下す。お浪は氣味悪げに、

お浪「いえ、いえ、これは妾の妹。山口の藝子などではござんせぬぞ。

才兵衛「いや、藝子ぢや、梅松ぢや。これ、梅松。お前に聞きたい事もあり、噺したい事もある。ま、ま、此方向かんか。

手を伸して袂を曳かんとするに、お浪押隔てゝ、

お浪「えゝ、此人は猥らしい。何を爲なさる。

才兵衛「はて、まあ、可えと云ふに……。

草鞋のまゝにて縁に登りかゝる。この家の主人、平家蟹の五郎藏。厚志、藁草履にて出で、門口にて始終を窺ひゐたりしが、やがて衝と入りて、才兵衛を引退け、

五郎藏「女ばかりと侮つて、汝ア一體何をするのだ。悪く巫山戯ると簀巻にして、壇の浦へ叩ッ込むぞ。

才兵衛「や、豪い威勢や。千本櫻の渡海屋銀平丸出しぢやな。

五郎藏「えゝ、ぐず〳〵云はずと早く歸れ。えゝ、歸れ。歸らねえと料見があるぞ。

と傍に有合ふ櫂を取る。

才兵衛「はて、氣の短い。今行くがな。

才兵衛早々に下手へ入る。五郎藏、門を閉めて内に入り、

五郎藏「何だか怪しい奴だな。

梅松「山口の湯田で一二度座敷へ聘ばれた人、大阪の材木商人とか云ふけれど、取つて付け

たやうな上方訛。

お浜「若や江戸の隠密ではあるまいか。

五郎蔵「大方そんな事だらう。過日委しく伺つた所では、高槻様には二つの仇がある。一つは同じお屋敷内の俗論黨とか云ふ徒、又一つは江戸の隠密。この二つに年中附狙はれてゐるのだから、片時も油断はなりやアしねえ。どんな大きな鯨でも、四方八方から取卷れゝば、終局には餌を喰ふ道理。どうか無事に落して上げたいものだが……。

梅松「それでも兄さんが心を入替へ、妾達の味方になつて呉れたので、どんなに氣丈夫だか知れませんよ。

五郎蔵「俺も餓鬼の時から身狀が悪く、何でも横に曲つて行くので、こゝの名物の平家蟹といふ綽名を取り、これまで随分他人を泣かしたが、先月湯田の瓦屋で、始めて高槻様にお目にかゝつた時、同じ亂暴をするのなら、善人になつて亂暴を爲ろといふ、面白い御意見が氣に入つて、それから急に心を入れ替へ、相變らず亂暴はするけれど、善い事の方で暴れた意だ。お浪、これから俺が暴れても、手前達は決して意見するな。

お浜「善い事ならば意見は爲ないが、それが長く續いて呉れゝば可いが……。

長吉「阿父さんが善い人になれば、我も諸人に可愛がられラア。

五郎蔵「俺も男だ。船玉様へ誓を立てゝ、二度と悪い方へは足を向けねえ意だ。時に高槻様は……。

梅松「先刻から奥に寢てゐますが……。

五郎蔵「むゝ。度胸の好い方は違つたものだ。少し申上げたい事もあるから、お起し申してお茶でも上げろ。

梅松「あい、あい。

梅松起たんとする時、奥より高槻新作、着流し、一本指にて出で、

新作「私に何ぞ用でもあるか。盗人の午睡も最う醒めた。はゝゝゝ。

笑ひながら座に着けば、五郎蔵は左右を顧り、

五郎蔵「お浪。裏口に氣をつけろ。長吉も彼方へ行つて遊んでゐろ。

お浜「あい。

お浪と長吉は奥へ入る。五郎蔵は縁を降りて門口を窺ひ、再び座に復りて、

五郎蔵「高槻様。もう此處にうか〳〵と御逗留はなりますまい。お屋敷の方から此の浦々へ悉

皆お觸が廻つて居ります。

新作「お觸と申しても、君公直々の御沙汰で無く、彼の俗論黨一派が私の計ひに相違あるまい。今彼等の手に罹つては、折角の苦心も水の泡ぢや。卑怯な樣ぢやが高槻新作、身を全うして時節を待つ覺悟。就ては、一日も早う御領分内を立退くと致さう。

五郎藏「それが宜しうございませう。今日此頃の有樣では、御領分内は劍の中、斯うしてゐる中も油斷がなりませぬ。昔から芝居や草双紙にもある通り、忠義のお方は世を狹められ、艱難辛苦をなさるとは、口惜い事でございます。

新作「いや、何事も天ぢや、命ぢや。人多ぎ時は天に克つ、天定つて後能く人に克つ。やがては天運循環して、人に克つ時節も來るであらう。

梅松「其時節が何日來るやら……。

と凋るれば。新作は笑ひに紛らして、

新作「來る、來る。三四年の中には屹と來る。五郎藏、思ひ立つ日が吉日ぢや。今夜の中に船を出しては呉れまいか。

梅松「では、もう御出立でござんすか。

五郎藏「丁度今日は八幡樣のお祭で、濱は混雜してゐるのを幸ひ、日の暮れる頃から乘出して、向地へ着けば最う安心。とは云ふものゝ、港口には網を張つて、鵜の目鷹の目の詮議最中へ、此のまゝのお裝では……。

と首を傾ける。新作うなづきて、

新作「むゝ。萬一の時の用心にもと、豫て其準備は致してある。梅松、私の髮を剃落して呉れ。

梅松「え、あなたのお頭を……。

新作「青坊主になつて袈裟法衣ぢや。

五郎藏「成程、それは好い御趣向。いくら嚴重に見張つてゐても、流石に然うとは氣が注きますまい。

梅松「でも、餘り情ない……。

新作「髮は剃つても又伸る。罷間違へば首さへ落ちる時節に、髮を落す位が何であらう。剃刀を早う持つて來い。

梅松「そんなら何うでも……。

新作「坊主になつては愛想が竭きるか。

と笑ふ。五郎藏は妹を顧り、

五郎藏「旦那樣が彼樣被仰るもんだ。嫌でもあらうがお詞に任せて、綺麗に剃つて上げるが可からう。

梅松「あい。

梅松は進まぬながらに起ち上りて、押入より鏡、鏡立、剃刀など取出し來り、鏡を新作の前に直す。

新作「長州風の大髻も、今日を限りに剃落せば、先づ當分は鏡の中に、昔の面影は見られぬ喃。

と鏡を把つて我顏を照し視る。梅松も悲しき風情にて、

梅松「末練な事を云ふ樣なれど、寢亂れ髮の後毛を一度綺麗に搔きあげて、妾にも泌々と顏を見せた上、切るとも剃るとも爲て下さいまし。

我が櫛を把りて、男の髮を搔き上げる。

五郎藏「わたくし共は船頭商賣、沖で風雨を喰つた時に、金比羅樣へ願をかけ、髻を切つて海へ投げ込み、漸く助つて歸つて來ても、昔に變る散し髮の顏を見りやア女房や娘は泣くのが習。況て立派なお武家樣が、元服でもする事か、髮を剃つて坊主になる。こんな情ねえ事はねえ。妹が末練を云ふのも道理でございますよ。

手拭にて眼を拭へば、

梅松「兄さん、察して下さい。高槻さん。これが一生の別れにならうも知れぬ。お武士の顏でゐる中に、もう一度好く見せて下さいまし。妾、決して泣きやアしませんから……

……。

と新作の膝に縋りて顏を見合せ、泣かじと口唇を咬みて堪ゆる。新作も思はず顏を背ける。五郎藏も見るに忍びぬ顏を背けて、

五郎藏「これ、妹。平生の氣性の樣にもねえ。斯う云ふ時に涙は不吉だ。

梅松「だから、泣きやアしませんよ。妾は泣くやうな意氣地無しぢやアありませんよ。

と涙を嚥込んで、猶も新作に縋る。折柄、祭禮の囃子の音近く聞ゆるに、梅松驚きて顏をあげる。

五郎藏「おゝ、祭の練物が此方へ廻つて來る樣だ。外から見えては惡からう。

と奥へ隠れよと頤で示せば、兩人うなづき、新作は鋭を持ち、梅松は剃刀を持つて、上手の障子の中へ入る。引違へて奥よりお浪眼を拭きながら出で來り、

お浪「今あすこで聽いてゐれば、高槻樣は坊主にお成りなさるとね。

五郎藏「實にお氣の毒で俺ア涙が飜れた。あの方々の一心ばかりでも、やがて日本は顚覆つて、徳川や會津は亡るに相違ねえ。屹と受合、石に判だ。

お浪「でも、若し中途で仕損じたら……。

五郎藏「えゝ、緣喜でもねえ事を云ふな。向地までは一跨ぎの路程だが、今夜の船出は大事の役だ。海上安全を祈願の爲、船玉樣へ御神酒でも供へろ。

お浪「あい。

起つて奥へ入り、神酒徳利など持來りて神棚に供へる。祭禮の囃子の音愈々近きて、濱邊の方より揃衣を着たる踊子大勢出で來り、

唄「萩の濱へは鯨が來るに、下の關へは敵が來る。

唄「平家負けても長州は負けぬ、海で負れば山で勝つ。

右の唄にて、踊りながら向ふへ入る。向ふより前原彦次郎、菅笠、脚袢、草鞋、糸

筵を被て、旅商人の服裝。花道にて踊子と摺れ違ひながら、門口に來りて內を窺ひ、

彦次郎「御免なさい。

と町人の樣に云ふ。

五郎藏「又誰か來たか。此頃は油斷がならねえ。

お浪「先刻のやうな奴が來るから、迂濶しては居られないよ。

お浪出ようとするを、五郎藏は眼で制して、自ら起つて門に來り、

五郎藏「何人でございます。

彦次郎「お前は主人か。

と武士の詞になりて、聲を低め、

彦次郎「當家に高槻が參つて居らうな。

五郎藏「え。(と彦次郎の顏を見て)いえ、其樣なお方は……。

彦次郎「いや。居らぬ事はあるまい。私は高槻の味方の者ぢや。隱すな。

五郎藏「へえ。

とお浪と顏を見合せる。お浪は油斷するなと眼で知らせる。

五郎藏「いくら何と被仰つても、居ない者は居ないと申すより他はございません。他を尋ねて御覽なさいまし。

彦次郎「はて、當家に忍んで居る事を。確に知つて參つた者ぢや。隱すな。早う逢はして呉れ。此方が急くほど五郎藏は猶疑ひて、

五郎藏「いつまで云つても同じ事で、居ない者に逢せろとは、あなたが御無理で……。

彦次郎「えゝ、解らぬ奴。然らば入つて家探しするぞ。

少しく悶れたる氣色にて、つか〳〵と内へ入る。五郎藏は早や是までぞと覺悟して、有合ふ櫂を押取つて、不意に背後より擊つて蒐る。彦次郎、身を替して櫂を掴み、

彦次郎「えゝ、何を致す。慌て者奴。

櫂を突放して行かんとすれば、五郎藏又もや擊つて蒐る。彦次郎は赤手にて接ふ。お浪は夫に加勢して、壁にかけたる裝笠を投げ付ける。悴長吉も奥より走り出で、緣を駈け降りて彦次郎の脚に絡むを、彦次郎蹴放して、五郎藏を取つて押へる。上手の障子を明けて、新作は坊主頭、袈裟法衣にて出で、

新作「前原。待て、待て。

彦次郎「おゝ、高槻か。不思議に化けたな。

新作「化けた、化けた。此通りの狸和尚ぢや。

と頭を撫でる。彦次郎も笑ひて、

彦次郎「何しろ、無事で重疊ぢや。

新作「まあ、上れ。

彦次郎「いや、沈着いても居られまい。(と緣に腰をかけ)扨、高槻、これから何方へ落ちるな。

新作「九州は先づ小倉の意ぢやが……。

彦次郎「いや、小倉は危い。既に俗論黨の手が廻つて居るぞ。うか〳〵行つたら、飛で火に入るのぢや。それを知らさうと思うて、斯樣に姿を變へ、山口から追うて來た。

五郎藏「然うとも知らず、一廉の善人振つて今の亂暴。實に恐入りました。(と頭を搔く)

新作「前原、忝けない。では、博多へ落ちて、筑前藩を頼むとせう。而て、山口の模樣は何うぢやな。

彦次郎「俗論は愈々蔓延つて、三十六萬石の御城内も闇黑ぢや。唯今の有樣では、一藩の運命を賭して、勤王の大義を唱ふるなど思ひも寄らぬぞ。

新作「では、まだ當分は德川の代か喃。(と嘆息して)時に櫻井は何うした。

彦次郎「母御の厚い看病で、櫻井は命を取止めた。喜んで呉れ。

新作「それは何よりぢや。櫻井に逢うたらば、一度や二度の失敗に必ず撓むな。高槻は一旦身を隠しても、土を捲いて重ねて來るぞと傳へて呉れ。貴公も體を大事にせい。

彦次郎「では、先づ當分は逢はれまいな。私よりも貴公こそ大事の體ぢや。勇氣に任して餘り亂暴をするなよ。

新作「以前とは違うて、今は法衣の手前、柔和忍辱を旨とせねばなるまいか。些と窮屈な事ぢやな。はゝゝゝゝ。

彦次郎「はゝゝゝゝ。まあ、まあ、辛抱せい。

奥より梅松は杖、笠、草鞋など持ちて出で、

梅松「前原樣。久濶でございました。

彦次郎「おゝ。梅松か。大事の色男を坊主にして了つた喃。

この時、以前の才兵衛、門口に忍び來りて窺ふ。長吉眼捷く見付けて、

長吉「あれ、誰か表に……。

五郎藏「え。

と駈け出でゝ才兵衛を引捕へ、無二無三に内へ引摺込み、

五郎藏「汝は先刻も來た怪しい奴。

梅松「大方江戸の間者。

新作「斬つて了へ。

彦次郎「むゝ。

と起ち上る。才兵衛も逃れぬ所と、懐中より匕首を把出して突いて蒐る。彦次郎は其の匕首を奪ひて脇腹に突き立てる。才兵衛倒れる。時の鐘。

五郎藏「高槻樣。もう日が暮れまする。

新作「おゝ、この夕潮に乘出さうか。

梅松手傳ひて、脚袢、草鞋を穿く。お浪長吉手傳ひて、五郎藏も船出の準備をする。

新作は杖と笠とを持つて庭に降立つ。

彦次郎「高槻。鬼の念佛、好う似合うたぞ。

新作「これは諸國行脚の僧にて候ふ。(と諧のやうに云ひ)斯樣に姿を變へたからは、これま

での高槻新作では面白うない。今日からは東行と名を變へたぞ。

彦次郎「むゝ、東行とは……。

新作「彼の西行に倣うて東行ぢや。

と少しく考へて、

西へ行く人を慕うて東行く
我心をば神や知るらん

彦次郎「天晴れ名歌ぢや。山家集に加へても耻しうないかも知れぬぞ。東行法師の筑紫下り、どれ、濱邊までお見送りせうか。

笠を持ちて起ち、お浪は五郎藏に對ひて、

お浪「お前も途中氣をつけて……。

長吉「早う戻つて下さりませ。

五郎藏「むゝ、大丈夫だ。直に歸るから安心しろ。

新作「では、前原。

彦次郎「もう行くか。

新作行きかゝる。梅松駈け寄つて法衣の袖に縋る。新作無言にて振拂ひ、笠を被る。

冬の日も暮れて、海の音。

【幕】

後編 白虎隊

上の巻 鐘撞堂前

若松城下、大手前（現今の菜町）の鐘撞堂。上手に石垣を高く積みて、上に大鐘を懸け、堂の傍らに銀杏の大樹あり。正面に古き番小屋、雪國の習として屋根は板にて葺きたり。明治元年八月廿一日の夕刻。

鐘撞番人作兵衛、五十餘歳。袖の狹き袷、山裁付（此國にては稼ぎ袴といふ）藁草履。娘お若、十七八歳、同じく袷、素足、藁草履。他に町人百姓、男女思ひ〳〵の服裝にて、大勢佇立む。

大勢「早打ぢや、早打ぢや。

と捨臺詞にて囂々云ひつゝ向ふを視る。向ふより人夫大勢に舁せたる早打の乘物一挺、宙を飛して走り來る。皆々駈け寄つて、

甲「早打は何でござるな。

乙「善い事か、惡い事か。

丙「聞かして下され、聞かして下され。

乘物の前後を圍みて、慌しく問ふ。人夫等は答へず、「えゝ、退け、退け。」と突退けて、一散に上手へ走り入る。後に皆々顔を見合せ、

作兵衛「今日は是で二度目の早打ぢや。

お若「どう云ふ報知か。關心の事でござりますな。

甲「いづれ越後口か白河口の御注進であらうが、萬一味方の負とあつたら、それこそ大事ぢや。喃、作兵衛どの。

作兵衛「おゝ、大事とも、大事とも。敵は山海嘯のやうな勢で、四方八方から押寄せて來るであらう。先年あの湯川が切れた時には、この御城下一面の水となつたが、今度は御城下が火にならうぞ。

甲「思へば〳〵怖しい事ぢやが、もし然うなつた曉には、

乙「わし等は一體どうしたら可からう喃。

作兵衛「今となつて狼狽へる事があるものか。それに就ては先頃も已に御觸が出て、萬一御城

下で軍が始まるやうな時節には、一刻も早う家財を取纒めて、喜多方の方へ落ちろとあるのぢや。

甲「ほんに然うであつた。では、作兵衛どのも其準備を爲つしやれたか。

作兵衛「いや。私は動かぬ。このお城の落ちぬ間は、死でもこゝを動かぬ意ぢや。

丙「とは又何故でござるな。

作兵衛「この大手前の鐘といふのは、御先祖様御入國以來、御城下の町人を始め、近郷近在の民百姓に、夜は寢よと敎へ、朝は起きよと告る大事の鐘で、この鐘の音の絶ゆる時は、即ちお家の亡る時ぢやと、昔からの傳説にもある位。其大事のお役を承はつてゐる作兵衛ぢや。どうして此處が動かれるものか。

甲「とは云ふものゝ、今にもこゝらで軍が始まつたら、鐘どころの沙汰ではあるまいが……。

作兵衛「いや、いや、たとひ火水の中であらうとも、時を違へずに撞いて見せう。私が死ねば娘が代つて撞く。喃、皆の衆。翌にも軍が始まつて、何處の果に逃隱れてござつてもこの鐘の音の聞える間は、お城は必ず落ちぬものと、心丈夫に思はつしやれ。

甲「成ほど、流石は作兵衛どの、立派な覺悟ぢや。それでは私等も家へ歸つて、萬一の時の準備を爲うかの。

作兵衛「おゝ、それが可い、それが可い。

甲「では、親子の衆。又逢ひませうぞ。

皆々捨臺詞にて翠々云ひつゝ下手へ入る。

お若「父さん。今お前が云はれた通り、たとひ何のやうな事があつても、妾等はこゝを動かぬのでござりますか。

作兵衛「むゝ。この鐘には私等親子の魂が宿つてゐると思へ。魂を捨てゝ體ばかりが何處へ行かれようぞ。はゝゝゝゝ。

云ひ捨てゝ番小屋へ入る。風の音、銀杏の葉はら〳〵と落ちて、鴉啼く。お若は空を仰ぎて佇立む。下手より瀧澤七之丞、十七歳。前髪、大小、袴、草履。鐵扇を持ちて出で來り、上手に行きかゝる。お若見て、

お若「おゝ、七之丞様でござりましたか。

七之丞「この夕暮に何を眺めて居るのぢや。

お者「お城の上で鴉があの樣に啼いて居りまする。」

七之丞「人が死ぬる時には、鴉が啼くといふぞ。

お者「えゝ、不吉な。何を被仰る。

七之丞「いや、不吉を忌むべき場合でない。今朝より再三の早打、委しき樣子は相分らぬが、恐く敗軍の注進であらう。

お者「えゝ。

七之丞「かねて覺悟の我々すらも、いさゝか不意に驚いた程であるから、お前達の慌つるも道理ぢやが、今となつては何とならう。上下心を一致して君を衞るまでの事。會津鍛冶に打せたる此の刀に、血を灑ぐべき時節は今ぢや。

お者「御道理でござりまする。女でこそあれ妾共も、いざ御大事と申す時には、分相應の御奉公も致す覺悟。父さんは鑓撞のお役。たとひ軍にならうとも、お城の落ちぬ間は決してこゝを動かぬと申して居りました。

七之丞「おゝ、天晴の覺悟、それでこそ此の御領内に生れた者ぢや。返すがゝも大事のお役を怠るな。（と空を仰ぎて）何時の間にか聞うなつた。秋の日は短い喃。

お者「どうやら雨を催してまゐりました。而て、これから學校へお越しでござりますか。

七之丞「何か申渡すべき筋あれば、一同打揃うて日新館（會津藩校）へ集れと、火急のお觸ぢや。

お者「では、もしやお前樣も……。

七之丞「出陣せいとの御沙汰かと思はるゝが、それは我々望む所。時誼に依ては遲くも明日、或は今夜の中にも、出陣いたす樣にならうも知れぬぞ。お前とは稚い頃からの馴染であつた喃。

お者「わたくしが東山路で、山犬に取まかれて泣いてゐる處へ、お前樣がお通りなされて、其鐵扇で山犬を、追拂つて下された事もござりました。

七之丞「わしが湯川で鯉を釣つて居る所へ、お前が背後から忍んで來て、不意に私を嚇したので、折角の魚を釣落して、わしが大層怒つた事があつた。

お者「むかしの事を考へますと、何だか夢の樣でござりますな。

七之丞「人の一生は皆夢ぢやよ。いや、思はぬ立談に時が移つた。

と行きかゝる。

お若「あゝ、もし。

七之丞「何ぢやな。

と振返る。お若は物云はず、名殘惜げに顏を視る。七之丞もお若の顏をぢつと視て、

七之丞「父子ともに達者で暮せ。

上手へ入る。お若、伸上りて北うしろ影を見送り、

お若「お武家樣と妾等とは身分こそ違へ、小兒の時から御近所に育つて、云はゞ稚馴染の七之丞樣。今でも學校への往復に、わたしの家の門口をお通りなさるを樂みに、毎日表に立つてゐたが、もう是がお別れか。別れとなれば……。

思ひに沈める風情。小屋の戸をあけて、作兵衛は半身を露はし、

作兵衛「これ、お若。いつまで外に立つてゐるのぢや。何だかぱら〳〵降つて來たでねえか。

お若「おゝ、何時の間にか雨が降つて來ました。

作兵衛「それだから云はねえ事か。此頃は夜風が冷える。況て濕れては體の毒ぢや。感冒でも引かぬやうに家へ入れ。

お若「あい、あい。

お若は小屋に入りて戸を閉める。雨の音。向ふより江戸の力士朝日嶽政五郎、廿四五歲、旅姿、脚袢、草鞋、一本指にて出づ。

政五郎「どうやら斯うやら御城下まで駈け着けたが、此頃の天氣癖で又ぱら〳〵降つて來やアがつた。(と空を仰ぎて)何、一霽時で止むだらう。何處か其處らに雨宿をする所はねえか知ら。何しろ、不案內の土地だから、日が暮れちやア見當が付かねえ。

四邊を透し視て、鐘撞堂に眼を着け、石段を登りて堂內へ入る。下手より白河の下女お松、十八九歲、雨傘をさし、猶一本の傘を抱えて足早に出づ。

上手より佐藤源之助、西田新七、何れも十六七歲の武家の子息。大小、袴、高下駄雨傘をさして出づ。お松思はず源之助に行き當る。

源之助「えゝ、何者ぢや、氣をつけろ。

お松「さう被仰るは佐藤の若旦那ぢやアねえかね。

新七「おゝ、白河の下女か。

お松「聞えのと急ぐのとで、つい疎忽しましたゞよ。時に家の御次男樣は未だ學校に居さッしやるかね。

源之助「萬次郎どのは、我々よりも一足先へ歸られた。

お松「え、御次男樣は先へ歸つた。はて、行違ひになつたかな。そんなら傘持つて來るぢやア無かつたに……。

新七「いや、いや、無益にはなるまい。何を申すも此の俄雨で、お前の主人の他にも、傘を持たぬ者が大勢あるやうぢや、誰かに貸して與るが可からう。

お松「それぢやア若旦那樣と仲好の七之丞樣に貸して上げますべえ。

源之助「早う行かぬと間に合はぬぞ。

お松「はい。急いで行きますべえ。

慌てゝ上手へ入る。

新七「翌は血の雨を浴びる我々に、雨を凌ぐ傘などは要らぬ筈ぢやが……。

源之助「いや、さうで無い。石田三成は最期の朝まで藥を飲んだと云ふ例もある。事に臨む其時までは、精々わが身を厭はねばならぬと、先生が豫て仰せられたぞ。

新七「成ほどお手前の云はるゝ通り、如何なる大事出來いたしても、決して騷がず、驚かず。堅忍不拔の精神を以て、徐ろに事に當るが、この會津の御家風でござる。

源之助「併し後れては不覺。早う歸つて仕度を致さう。

新七「それが宜しうござる。

兩人下手へ入る。番小屋の中にて、娘の聲。

お若「父さん。もう五つでございませうぞ。

作兵衛、戸をあけて、

作兵衛「おゝ、好鹽梅に雨も止んだ樣ぢや。

と鐘を撞かんとして。石段を登る時、上より朝日嶽政五郎降り來りて、作兵衛に行き當る。作兵衛、驚きて透し視て、

作兵衛「誰ぢや、誰ぢや。鐘撞堂に登つてゐたのは。

政五郎「私ぢや。料見さッしやれ。

作兵衛「詞の樣子では他國者らしいが、此頃は軍騷ぎで、旅の者の詮議が嚴しい。お前は一體何處から來た。

政五郎「私は江戸から來た者ぢや、決して胡亂な者ではござらぬ。

云ひ捨てゝ行かんとす。

作兵衛「えゝ、逃るのが猶怪しい。これ、待て、待て。（と探り寄つて胸の邊を掴む。）

政五郎「はて、煩い人ぢや。怪しい者では無いと云ふに……。

輕く突き放せば、力餘つて作兵衛は控と倒れ、

作兵衛「えゝ、怪しい者ぢや。他國者ぢや。

と喚く。上手より瀧澤七之丞、傘をさして出で、

七之丞「何、怪しい者……。

傘を投げ捨てゝ是も探り寄り、其の帶際を捉る。政五郎振り拂つて行かんとす。七之丞又引戻して、闇中に爭ふ。作兵衛は勝負を氣配ひながら、

作兵衛「これ、娘、早う火を持つて來いよ。

お若「あい、あい。

と附木に火を點して出れば、風にて火忽ち消ゆ。

作兵衛「えゝ、氣の注かぬ、そんな物ぢやア役に立ぬわ。大松明を點して來いよ。

お若慌てゝ内へ入る。こなたの兩人は猶探りながらに挑みゐる處へ、上手より瀧澤小左衛門（七之丞の父）上下、大小、足駄にて傘をさし、赤合羽の仲間に提灯を持せて出で、斯くと見て、

小左「それ。

と指揮すれば、仲間心得て提灯を差付ける。

小左「おゝ、怪か。

七之丞「阿父樣か。

小左「而て、對手の者は。

政五郎、躍りて、

政五郎「喧嘩はほんの行懸り、決してお手向ひ致したのではござりませぬ。

小左「むゝ。

と考へてゐる。小屋の内よりお若は松明を點して出で、政五郎を照し視て、

お若「こゝら邊には見馴れぬ風俗。

作兵衛「力士とでも云ひさう大の男ぢや。

七之丞「いよ〳〵怪しい……。

と刀に手をかくるを、小左衛門制して。

小左「こりや疎忽いたすな。待て待て。

【幕】

中の巻　白河屋敷

會津藩中、白河小十郎の留守宅。二重屋體にて、床に鎧櫃など飾りてあり。廿一日の夜。

白河の姉娘鶴代、十九歳、武家の娘の服裝。藥湯を入れたる茶碗を持ちて、奥より出で、

鶴代「千太郎。目が醒めて居りますか。

と上手の障子を明れば、白河の悴、千太郎、十七歳。前髪、病人の體にて枕を抱き蒲團の上に横はる。枕頭に刀あり。

鶴代「お藥が出來ました。

千太郎「毎度恐れ入りまする。

藥を頂きて飲む。

鶴代「けふは朝から大分快い樣でありましたが、先刻萬次郎が戻つてから、俄に顔の色が惡くなつたは、敗軍の報知を聽いた爲か。勝つも負るも軍の習と云へば、其樣に氣を落

してはなりませぬぞ。

千太郎「敗軍も勿論口惜うござりますが、猶口惜いは私が現今の體。姉様、お察し下さいまし。と無念の體。鶴代も慰め兼ねて嘆息する時、下手の庭口より朝日嶽政五郎、草鞋穿のまゝにて、下女お松に案内されて出づ。

お松「瀧澤の叔父御様の所から斯んな大え人が參りましたよ。

政五郎「初めてお目通り致しますが、わたくしは江戸の力士、朝日嶽政五郎と申す者でございます。

千太郎「朝日嶽とは豫て噂に聽いて居る、江戸のお屋敷のお抱力士では無いか。

政五郎「左様でございます。當家の旦那様が江戸詰の時分には、種々御引立にあづかりました。

鶴代「其の朝日嶽が何うしてこゝへ。

政五郎「御存知の通り、私はまだ二段目の尻にゐた頃から、一方ならぬ御贔負を蒙りまして、今では幕の内の數に入り、會津様のお抱力士と場所でも幅を利して居りましたが、思ひも寄らない今度の騒動で、お國では軍が始まるといふ噂、聞いて膽を潰しました。何しろ、こりやアうか〳〵してゐる時節でない。長年御恩を受けた殿様のお爲には、

命を捨てゝも御奉公を爲にやアならぬと、身一個で江戸を脱走して、六十五里の道中を今晩やう〳〵辿け着けました。

鶴代「おゝ、それは奇特の志、殿様お耳に入りましたら、さぞ御滿足に思召すであらう。

お松「それぢやアお前様は江戸のお關取かえ。道理で大え人だと思つたが……。

鶴代「あ、これ〳〵、朝日嶽は道中の疲もあらうに、茶でも汲んで來て遣はせ。

お松「かしこまりました。

お松、下手へ入る。この間、千太郎は無言にて俯向きゐたりしが、俄に咳き入る。

鶴代立寄つて背を撫る。

政五郎「お見受け申せば若旦那様は、お加減でもお悪いのでございますか。

鶴代「生憎に五六日前から風邪に罹つて、大事の御時節に此の始末。實に當惑して居ります。

千太郎「お家の大變を聞き及んで、江戸表より遥々駈着ける者さへあるに、現在御城下に住みながら、病の爲に歩行も叶はず、大事のお役に相立ぬとは、よく〳〵武運に竭きたる身ぢや。

政五郎「でも、多寡が御風邪でございますなら、熱さへ去れば二三日の中には、屹と御全快で

ございませう。

千太「二三日の後では最う遅い。軍は明日に迫つて居るぞ。

政五「へえ、では最うお國でも軍が始まりますか、成程さうでございませう。私が白河へ掛かりました時には、軍は疾うに濟んだ後で、噂を聞けば散々の始末、實に口惜うございました。こちらの旦那樣も惜い事を……。

鶴代「え、阿父樣が……。

千太「どうか爲されたか。

政五「では、まだ此存知ないのでございますか。若旦那樣の御病氣中に、こんな事を申上げるのも何でございますが、只今瀧澤の旦那樣から伺ひましたのでは、白河口の手負討死は五百人餘、其討死の方々の中には、白河小十郎と云ふお名前も……。

鶴代「何、阿父樣は白河の軍で……。

千太「討死をせられたと申すか。むゝ。

と思はず起んとして又倒れ、

千太「姉樣。わたくしの此の體……、この病が殘念でございます。

鶴代「あゝ、これ、其樣に悶れては惡い。

政五「阿父樣の亡い後は、お前樣は愈々大事のお體。大切になさらねばなりますまい。

千太「大事のお役にも立ぬ無用の體を、大切にしたとて何にならうぞ。

萬次「叔父樣がお越でございます。

鶴代「おゝ、叔父樣が見えましたか。

と席を改むる時、奥より瀧澤小左衛門。箙手の上に陣羽織、裁付、大小にて出づ。

小左「幸ひに皆揃うて居るな。

千太「叔父樣、お出迎ひも仕つりませぬ。

小左「いや、病中苦しうない。其まゝに致して居れ。

千太「餘り失禮でございますれば……。

と姉に扶けられて臥床を出で、下手に坐す。

政五「瀧澤の旦那樣でございますか。

小左「おゝ、朝日嶽、早かつたの。

政五郎「先刻から罷り出まして、白河口の軍から、こちらの旦那樣が討死の始末。逐一申上げて居りました。

小左「おゝ、左樣であつたか。時に千太郎の容體は何うぢやな。

鶴代「今日は大分宜しい樣でございますが、何分にも熱が未だ去り兼ねますので……。

小左「それは難儀であらう。

と千太郎の顏を見て、

小左「成ほど、血色が良うないの。

鶴代「これでは明日のお役にも立つまいかと、弟は勿論、わたしも共々に殘念に存じて居りまする。而て、軍の模樣は如何でございますな。

小左「委細は萬次郎からも聽いたであらうが、今朝來度々の早打によれば、味方は惣崩れ、白河口も越後口も皆敗れた。敵は勝に乘つて當國に亂入し、已に猪苗代邊まで寄せたとある。素破や大事と思ふに付けても、屈竟の武士共は皆四方に散つて居れば、何分にも味方の人數が不足ぢや、就ては、十五歲以上の男子は擧つて出陣、十八歲以上を朱雀隊といひ、十七歲以下を白虎隊と名け、明朝卯の刻を相圖に、戶口の原まで繰

出す事に決定いたした。千太郎も當年十七歲、無論其一人に加へらるべき筈ぢやが、病中とあれば是非もない、姉もろ共に御城内に引揚げて、本復の日を待つが可らう。鶴代、右の次第であれば、家内見苦しからざる樣に取片附けて、今宵の中にお城へまゐれ。

鶴代「斯ういふ御沙汰もござりませうかと、家内は疾に取片附けて置きましたれば、何時なりとも引揚げまする。

この中、千太郎は首を低れて無念の體。萬次郎は兄の袖を曳きて、

萬次郎「兄樣。

千太郎、默して答へず。萬次郎、重ねて、

萬次郎「兄樣。私は何歲でござりませうな。

千太郎「己の年を人に問ふ者があらうか。お前は卯年の生れ、當年十四歲では無いか。

萬次郎「いえ、わたくしは寅年の生れ、十五歲でござりまする。

千太郎「何、十五歲……。

其意を得ぬといふ體にて、弟の顏を視る。

萬次郎「十五歳でござりませうが唷。
と兄の顔を瞰上げる。千太郎、思はずほろりとして、其手を取り、
千太郎「むゝ、弟。よく申した。成ほど、お前は十五歳ぢや。叔父様、姉様、お聞きなされまし
たか。萬次郎は十五歳ぢやと申しまするが……。
小左「十五歳以上は白虎隊。
鶴代「そんならお前は……。
小左「よい、よい。誠は十四歳の萬次郎、十五歳と申立てゝ軍に出づるは、上を欺くに似たれども、餘り健氣な心に免じて、人數檢めは叔父の役、飽までも十五歳と取なして、白虎隊の人數に加へて遣はす。其心得にて準備いたせ。
政五郎は手を拍つて、
政五郎「いや、恐れ入りました。自分の年を多く云つて、軍のお伴に立たうとは、流石は白河様の御子息、實に立派なお覺悟でございます。草藁のかげで阿父様も嘸ぞお褒めなさるでございませう。
小左「おゝ、叔父も褒めて遣はすぞ。

萬次郎「ありがたうございます。
千太郎は之を見るに付け、聞くに付けて愈々煩悶に堪へず、屹となりて、
千太郎「叔父様。
小左「何ぢや。
千太郎「生甲斐も無き千太郎、只今切腹仕つりまする。何とぞ御介錯を……。
と刀を引寄せる。鶴代慌てゝ縋り止む。小左衛門、聲を勵まして、
小左「えゝ、若年とは申しながら、餘りに前後を省みぬ不覺者。軍は明日に限ると思ふか。日本中の大軍を引受け、一藩の運命を賭けて、根限りに戰ふ今度の軍、味方は一人たりとも多きを望む場合に、狗死して何となる。其の狼狽へた性根では、腹を切つても血は出まいぞ。
千太郎「狼狽者との御叱責は重々御道理。それを辨へぬ私でもございませぬが、明日の軍は我々の初陣、從兄弟同士の七之丞殿を始め、これまで一つ學校で、机を列べた朋輩が、揃ひの陣笠、揃ひの軍服、皆一様に扮裝つて、あれぞ會津の白虎隊よと、敵にも味方にも褒めらるゝ、曉の軍に私一人、數に洩れたる悲しさ口惜さ、お察しなされて下

さりませ。

鶴代「お前の氣質としては然うあらうが、叔父様の仰せの通り、急く所ではありますまい。

萬次郎「死ぬのは何日でも死なれませう。

政五郎「まあ、まあ、お待ちなされませ。

と皆々止める。奥より下女お松、茶を持つて出で、

お松「皆様のゐる前で、私等が斯んな事を云つちやア何だけれど、腹を切るなんぞとは飛でもねえ事でごせえますよ。今聞いてゐれば、御次男様は軍に行かつしやるッて……。私ア實に魂消たゞよ。何ぼ軍だからと云つて、こんな前髪の小せえ者までも駆出して、鐵砲玉の的にするとは、そりやア餘り酷らしいと云ふもんだ。流石はお武家の御子息だから、涙一滴飜さずに、覺悟は斷然と決めて居さッしやるだらうが、お悼しいやら可憫しいやらで、私ア泣かずにやアゐられねえ。

嗚咽ぐれば、政五郎も手拭を眼に當てゝ、

政五郎「そりやア私も同じ事で、口でこそ立派なお覺悟と、お褒め申しては居るけれど、腹の中ちやア泣いてゐる。是が世間の子供なら、十四や十五は惡戯盛、師匠や親に世話を

焼かす奴が多いのに、お武家育とは云ひながら、覺悟を決めて死に行くとは、餘り立派過ぎて憫らしい。鬼の眼にも涙とやらで、私も思はず涙が飜れた。

お松「それも何うしても行かねえぢやアならねえと云ふなら、よく氣をつけて、怪我なんぞ爲ねえ様になせえましよ。こりやア柳津の虚空藏様のお守で、これを頸に掛けてゐれば、惡事災難を逃れると云ふだから、どうぞ之を持つて行つて下せえましよ。

と頸にかけたる守袋を出す。

鶴代「其親切は忝けないが、武士に取つては忠孝が身の守、他には守もお符も要りませぬ。

萬次郎「これはお前の身に着けて置くが可いぞ。

お松「それぢやア要らねえかね。(と守符を再び我頸にかけて)さう云ふ譯ぢやア私はお暇が出ますかね。

鶴代「お前にも永々世話になりましたが、聞く通りの次第であるから、氣の毒ながら暇を出します。就ては、形見の品を遣りませうから、妾と一緒に奥へまゐるが可い。

お松「はい。有難うごせえます。

鶴代に從ひて、お松は奥に入る。時の鐘。

小左「おゝ、私も登城いたす時刻。朝日嶽、皆々と同道して、お前も後からお城へまゐれ。

政五郎「かしこまりました。

小左「萬次郎、出陣の準備を怠るな。

と起ち上る。千太郎、膝行寄つて、

千太郎「叔父様、殘念でございまする。

と陣羽織に縋る。小左衛門は不憫と思へども、わざと荒けなく、

小左「えゝ、まだ申すか（と振切つて）解らぬ奴ぢや喃。

云ひ捨てゝ奥へ入る。千太郎、悶えて倒る。萬次郎寄つて介抱し、

萬次郎「兄様、何時までも風に當つて居つては惡うございませう。些とお寢みなされては如何でございます。

千太郎「寢よと申したとて寢て居られようか。萬次郎、お前は羨ましい喃。それに引替へて兄の不運、昔から物の役に立ぬ侍を、腰拔武士とは好う云うた。大事の時に足腰立ぬゝこの千太郎は眞の腰ぬけ。只今叔父様も云はれた通り、この腐つた體からは、切つても突いても血は出まい。腹を切るも刀の穢れぢや。

刀を投げ出して無念に泣き倒れる。庭口より池澤七之丞、佐藤源之助、西田新七、いづれも白虎隊の服裝、黑の筒袖、袖に合印の會の字を緋羅紗に縫はせ、裁付、大小、草鞋、黑塗の陣笠を持ちて出で、

七之丞「千太郎どの、明日いよ〳〵出陣と相成りましたが……。

源之助「御病氣ゆゑ如何と存じて、

新七「御見舞かた〴〵お尋ね申した。

と云ふ。千太郎、嘆息して、

千太郎「御覽の通り、腑甲斐なき始末。たゞ〳〵殘念に存じまする。

七之丞「では、出陣は叶ひませぬか。お手前とは從兄弟同士と云ひ、且は日頃より仲好しの我我、此度の軍には、生死を俱にせんと存じて居つたに、さりとは殘念の儀ぢや喃。

源之助「いかなる勇士も病には克れぬ道理、御心中お察し申すぞ。

新七「われ〳〵は今宵かぎりの命、これが今生のお別れでござらう。

萬次郎「わたくしが兄の名代にお伴いたしますれば、何とぞ宜しう願ひまする。

七之丞「何、お手前が……。白虎隊は十五歳以上と承はつたが……。

萬次郎「叔父様にお願ひ申して、衆向は十五歳と申立て、白虎隊の數に入りました。

七之丞「いや、天晴れの覺悟、七之丞感心いたした。お手前も拙者も同じく日新館には通ひながら、年齢も違へば稽古も違うて、お手並を篤と拜見した事もござらぬが、失禮ながら其細腕で、見事お役に立ちますかな。

萬次郎「未熟ながら萬次郎の手の内、御覽に入れませうか。

七之丞「むゝ、面白い。お對手いたさう。

萬次郎「只今道具を持つて參りまする。

萬次郎は奥へ入る。朝日嶽、進み出で、

政五郎「瀧澤の若旦那様、先刻は飛だ失禮を致しました。

七之丞「いや、あれは私の疎忽であつた。名乘掛けずに打つて蒐るといふ法は無い筈ぢや。

政五郎「わたくしも早く名乘れば可いものを、何にも云はずに闇試合、危い事でございました。

奥より萬次郎、竹刀三本持ちて出で、

萬次郎「では、お稽古を願ひまする。

七之丞「わしは是で可い。さあ、まゐられい。

と鐵扇を把直す。千太郎見て、

千太郎「七之丞どのは免許の達人ぢや、氣を奪はれて不覺を取るな。面も振らずに打つて行け。

萬次郎「はッ。

竹刀を把つて打つて蒐る。七之丞は鐵扇と陣笠にて接ひ、遂に鐵扇にて竹刀を押へ、

七之丞「年に似合はぬお手並、見事、見事。これでは翌もお手柄を爲さるであらう。

萬次郎「恐れ入りました。

と會釋して退く。千太郎は先刻より羨ましげに伸び上りて勝負を見物してゐたるが

今は堪り兼ねて、

千太郎「萬次郎、竹刀を出せ。

七之丞「え、お手前が……。

千太郎「むゝ。餘りに羨ましい。たゞ見物して居るのは殘念ぢや。

竹刀を杖にして起ち上る。

源之助「でも、お手前は其體で……。

千太郎「倒るゝまでも打合うて見よう。

新七「然らば手前お對手いたさう。

新七、竹刀を把る。千太郎よろめきながら庭に降り、互に打合ふ間に、千太郎は勇氣漸次に加はりて、新七危くなる。源之助も竹刀を把つて打つて蒐り、三人烈しく鬪ふ。七之丞と朝日嶽も之を見て喜ぶ。奥より鶴代、一刀を指し、甲斐々々しき姿にて出で來り、これも眼を放さず試合を見てゐたるが、好き程に、

鶴代「あゝ、これ、これ、勝負は好い程にして、早う準備をしませぬか。千太郎も其れでは お伴が出來ませうぞ。

と聲をかける。これにて三人は竹刀を收め、

源之助「病氣と侮つて居つたる處、思ひの外なる今の働き。

新七「危く打込まれる所でござつた。

七之丞「身體壯健なる折柄と些とも變らぬ千太郎どの。其お手並を見るからは、最早危む所はござらぬ。

政五郎「芝居でする壁勝五郎の足が起つたも同樣で、こんな嬉しい事はございません。

と皆々喜ぶ。千太郎も我ながら不思議の思ひにて、

千太「今の今までも、身動きさへ自由で無かりし身が、我ながら不思議と思ふまでに、元氣旺盛になつたるは……。

政五郎「どんなに力の無い者でも、いざ火事だと云ふ時には、重い者を擔ぎ出すと同じ理屈で體の働きよりも心の働き、何でも氣の持樣でございませう。

七之丞「朝日嶽の申す通り、これも神經の作用で、斯る例は往々ある事ぢや。此上は些とも早う……。

鶴代「兄弟ともに準備を爲や。

萬次「では、兄樣も……。

千太郎「おゝ、お前と一緒に軍に出ようぞ。

皆々勇んで起つ。

【幕】

下の巻　白虎隊最期

飯盛山麓。正面に古たる藁葺屋根の辨天堂ありて、堂の前には杉の大樹聳び立つ。背後は山續きにして樹木深く、上手には山頂へ登り行くべき坂路あり。下手には山を穿ちたる洞穴あり。猪苗代湖の支流は、此穴より落ち來りて山下の湯川に注げり。

八月廿三日の午下。

町人百姓など男女大勢走り出づ。其中に白河の下女お松も雜りて出づ。

甲「とう〳〵苛い事になつて了うた喃。

乙「御城内總出の軍だから、今度こそは屹と勝つだらうと思つてゐたに……。

丙「わづか半日か一日で斯んなに脆く負けるとは何うした事だか。

丁「私ア まるで夢の樣だよ。

お松、前に出て、

お松「もし、軍は何うしても負でごせえますかね。

甲「おゝ、お前は白河樣のお松どんか。私も委しい事は知らぬが、何でも戸口の軍は大

負だと云ふ噂だ。

乙「殿樣も滝澤口まで御出張であつたが、半時ほど前に御城内へお引揚げになつたから、味方の負に相違あるまい。

お松「ぢやア私が所の若旦那樣も、怪我でも爲さりやアしめえかね。

甲「成ほどお前の屋敷では、御兄弟とも白虎隊に加はつて、今日の軍に出なすつたのだな。

お松「私は昨日お暇になつて、直に在所へ戻らうかと思つたけれど、餘り心配でなんねえから、朝から方々を彷徨いて、耳を引立てゝ噂を聽いてゐるだ。

乙「お前は平常からお主思ひだから、案じるのも道理だが……。

丙「何を云ふにも此の騷動では、安否もちよツくら分るめえよ。

丁「何しろ、情ねえ事になつた喃。

お松「何うしますべえ、どうしますべえ。

と泣く。皆々『泣かつしやるな、今に分らう』など、口々に慰める。東の揚幕より作兵衛の娘お若、走り出で、

お若「もし、もし、軍の模樣は分りませぬか。何でも負だと聞ましたが……。

甲「さあ、それだから案じてゐるのだ。
小銃の音遠く聞ゆ。皆々向ふを見て、
お若「今朝から鐵砲の音が、間斷無しに聞えてゐたが、漸次近うなりましたな。
お松「敵が追々繰込んで來るのぢやァあるめえかね。
皆々心配の體にて向ふを見る時、突然に大砲の音聞ゆ。皆々耳を掩うて地に伏せしが、やがて顏をあげ、
甲「や、どうも凄じい音であつた。大砲は是で三度目だ。
乙「お城の方に聞えたから、これも敵の方から擊出したのであらう。
丙「何でも先刻の一個は、鐘撞堂の近所に落ちたらしかつたが……。
丁「お若さんの家には障は無かつたかね。
お若「成程、そんな噂も聽きましたが、それは妾が家を出た後の事。留守は父さん一人で、萬一怪我でもせねば可いが……。
東の揚幕より町人一人走り出で、
町人「何でこんな處にうろ〳〵してゐるのだ。敵はどん〳〵繰込んで來て、躊躇してゐると

逃路が無くなるぞ。
お若「敵はいよ〳〵繰込んで來ましたか。
町人「おゝ、お若さん、お前まだ知らないのか。父さんは先刻の大砲に中つて……。
お若「え、父さんが……。
町人「可哀想に粉微塵だ。
お若「え。
と色を變ゆれば、皆々も驚きて、
甲「何、作兵衛どんが斃れた。いや、それは大變だ。
乙「まご〳〵してゐると、今度は此方の番だぞ。
町人「些とも早く逃げるが可い。何でも白虎隊の侍衆も、間道傳ひに此方へ落ちて來るさうだ。
お若思はず、進み出で、
お若「え、白虎隊がこゝへ……。
甲「然うなつたら又こゝで軍が始まるであらう。愈々迂濶してはゐられぬ譯だ。

又もや大砲の音。皆々狼狽へて、

甲「こりや最う堪らぬ。

皆々「逃げろ、逃げろ。

皆々慌てゝ上下へ逃げ入る。お若とお松は後に殘り、

お松「こりやアまあ、情ねえ事になつたなあ。もし、お若さん。お前どうする意だよ。

お若、答へず。獨語のやうに、

お若「白虎隊がこゝへ來るとあれば、滝澤の七之丞様も……。

お松「七之丞様よりも、私が若旦那様は何うしたゞらうねえ。

お若、答へず。依然獨語。

お若「こゝに待つてゐたならば、其の御安否も分るであらう。若しお怪我でも爲されてゐたら、何處へなりともお伴して、能る限りの御介抱。

お松「どんな怪我でも命さへあれば、手を曳いても、負つてもお連れ申すが、作兵衛どんの様に、粉微塵になつちやア仕様がねえ。

これにてお若、俄に心付きたる如く、

お若「おゝ、父さん。

と思はず叫びて、

お若「父さんは敵に……大砲に……斃れて了うた。日頃父さんが云はれたには、鐘を撞くのは大事の役、あの鐘の音の絶えぬ間は、お城は落ちぬ……。ほんに然うぢや、あの鐘の音が聞えぬ時は四方に散つてゐる味方のお侍衆や、御領内の百姓衆までが、お城は落ちたと思うであらう。これから父さんに成代つて、妾が撞かねばなるまいか。

と行かんとせしが、又立戻りて、

お若「とは云ふものゝ、妾が行つて了うた後へ、白虎隊の方々が……あの七之丞様が……。いや、いや、父さんの死顔も……鐘も……。

お若は行きつ戻りつ、悶えに悶えて、

お若「心は二つ……あゝ、體が二個欲い晴。

と思案の體。又もや小銃の音烈しく聞ゆ。

お松「こりや迂濶しちやアゐられねえ。お若さん、お若さん。

呼べどもお若は猶答へず。お松はうろ〳〵して、

お松「こんな所にうろ付てゐて、流丸でも喰つちやア堪らねえ。どこか隠れる所はねえものだらうか。お若さんも早く來さッせえよ。

四邊を見廻して辨天堂のうしろに隠れる。お若思はず蹌踉となりて、杉の立木に凭れ、ぢッと思案に暮れてゐる。下手の洞穴の中より瀧澤七之丞、亂髪に白の鉢巻、小銃を脊負ひて忍び出で、水を渡りて辨天堂の前に來り、

七之丞「お若ではないか。

お若「え、(と顔をあげて) おゝ、七之丞様。御無事でござりましたか。

七之丞「無事は無事ぢやが、軍は負けた。お若、もう何時であらうな。

お若「さあ、やがて七つでござりませう。

七之丞「では、鐘の聞ゆる頃ぢやな。

お若、涙を拭ひて、

お若「其の鐘を撞く父は、大砲に撃れました。

七之丞「おゝ、作兵衛は撃れたか。(と嘆息して) 他に代つて撞く者は無いか。

とお若の顔を見る。

お若「わたくしが撞きまする。

七之丞「おゝ、左様か。

と早く行けと云ふ思入。お若、心殘りの風情にて、

お若「而て、お前様はこれから何うなされまする。

七之丞「わしは餘の人々を待合せて生死進退を俱にする覺悟ぢや。もうお前にも逢れまい喃。

お若泣き伏す。進軍の喇叭の音聞ゆ。七之丞、屹となつて、

七之丞「敵の大軍寄せ來るとも、お城は落ちぬと云ふ報知の鐘。時を遠へずに撞かねばなるまい。

お若「でも、此のまゝには……。

起ち兼ぬるに、七之丞は聲を勵まして、

七之丞「鐘を撞くのはお家の爲ぢやぞ。

お若「はッ。

と屹となつて起上り、弛みし帶を引締めつゝ、

お若「女の腕の弱くとも、父子の魂が宿りし鐘。この御城下は云ふも恐し天にも響けと撞きませう。

七之丞「むゝ。早う行け。

お若「はッ。

お若、東の揚幕へ一散に駈けて入る。七之丞、ぢッと後を見送る。洞穴の中より白河千太郎、弟萬次郎は手負の體にて、手足を白布に巻き、兄に扶けられて忍び出づ。

千太郎「七之丞どの。

七之丞「千太郎どの。案内知つたる猪苗代の間道傳ひに、二里餘の路を落ちて參つたが、幸ひに敵にも見咎められず、兎も角もこゝまでは到着いたした。

千太郎「暫時これにて休息して、遅れたる人々を待つとせうか。

七之丞は堂の縁に腰をかけ、千太郎兄弟は切株に腰を下して、濕れたる衣類を絞りつゝ、

七之丞「引揚の混雑で、一々お打合せも致さゞりしが、餘の人々も皆この間道から參られますか。

千太郎「いや、山越しに落ちてまゐる人もある筈。何れにしても大方はこゝで落合ふ事でござらう。

萬次郎「我々の他にも猶十五六人は無事でございました。

七之丞「お城を出づる砌には、我が白虎隊も數十人でごぢやつたが、廿餘人は討死し、他は散亂して行方も分らず、無事にこゝまで引揚げし者、僅に廿人に過ぎぬとは、殘念至極の儀でござる喃。

千太郎「何を申すも敵は大軍、薩長土の三藩を先鋒として、大垣、大村諸藩の兵、殊に大砲をも夥多有つて居れば、平場の軍に敵對し難く、斯く散々に打なされたるは、強ちに我我の不覺とのみは申されまい。

萬次郎「とは云ふものゝ軍に負けるは口惜しいものでございまするな。

七之丞「勿論ぢや。私も胸が沸返る樣に思ふぞ。併し力を落すまい。今日負れば翌又戰ひ、翌も負れば明後日又戰ひ、最後の一人となるまでも、根強く堪へる覺悟が大事ぢやと、我々常に教へられて居る。

千太郎「人は表面の勇氣よりも、底力が無うてはならぬぞ。萬次郎、お前の體にも東北武士の

血が流れて居らう。表は水の如く冷かにして、裏に燃る火を包む。それが我々の誇とする所ぢや。

萬次郎「恐れ入つてござりまする。

洞穴の中より佐藤源之助、西田新七、出で、

源之助「各位、お早うござつたな。こゝまで參れば一安堵。

新七「餘の人々は山越しに、やがて追ひ着くでござらう。

小銃の音近く、喇叭聞ゆ。

七之丞「むゝ、あの喇叭は。

千太郎「進軍の相圖ではあるまいか。

萬次郎「敵はいよ〳〵近づきましたな。

源之助「勝に乘つて御城下まで。

新七「平押しに押して參つたか。

七之丞「兎も角もあれへ登つて物見を致さう。

皆々「むゝ。

皆々急ぎて上手の坂路へ行きかゝる。堂の陰よりお松走り出で、伸び上りて其後影を見送る。

道具は最初の鐘撞堂に變りて、舞臺の中央に堂を見る。小銃の音間斷無く聞ゆ。以前の町人百姓など何れも城下を立退く體にて、思ひ〳〵に荷物など擔ぎて、上手下手より走り出で、摺れ違ひに入る。

向ふよりお若、息を切つて走り來り、鐘撞堂の前に來りて、ばッたり倒れしが又起き上りて番小屋に入り、柄杓の水を汲み來りて水を飲み、ほッと一息。鐘撞堂を見むげて柄杓を投げ捨て、石段を登らんとするも息疲れて歩み難く、幾たびか蹉きつ起きつ、やう〳〵に這ひ上りて柱に取付き、

お若「七之丞様は……。

と向ふを見て昏々となる。小銃の音又聞ゆ。お若氣を取直して撞木を掴み、力任せに一つ撞きしが力盡きて倒れ、又起上つて撞かんとする時、下手より朝日嶽政五郎は向鉢巻、彈丸避けの楯に畳を持ちて走り出で、堂を見あげて、

政五郎「おゝ、豪い、豪い。撞けずば私が代らうか。

お若「いや、いや、倒れる迄も……。

と縋けて撞く。錦切の歩兵一人出で、政五郎に切つて蒐る。政五郎身を替して敵を押へながら堂を見あげる。お若は力疲きて跟蹌となり、柱に縋りて向ふを見ながら心臓の破裂せし狀にて、がッくり落入る。

道具は飯盛山中腹に變りて、上手に遠く若松城、つゞいて城下の人家より火の手颯りて見ゆ。七之丞、千太郎、源之助、新七、萬次郎等はこゝに登り來りて上手を瞰下し、

七之丞「や、お城のあたりは一面の火となつた。

千太郎「大手前の武家屋敷は云ふに及ばず。

源之助「北の出丸も烟の中ぢや。

新七「敵は御城下に充滿して。

萬次郎「二重三重に取圍んだ。

七之丞「斯樣に通路を杜がれては、迚もお城へは歸られまい。

皆々「むゝ。

と土に坐して失望嘆息す。

千太郎「烟に隱れて確とは見えぬが、敵と火焔に包まれて、二百年來連綿たりし若松のお城も最う落つるか。

七之丞「あの烟の中には殿樣もござる。

千太郎「叔父樣も居る。

源之助「父も居る。

新七「母も居る。

萬次郎「姉樣も居りませう。

七之丞「それを見ながら歸られず。

皆々城を望みて泣く時、鐘の聲遠く聞ゆ。皆々耳を傾ける。七之丞は伸上りて、

七之丞「や、鐘が鳴つた。

千太郎「あの鐘の音が聞ゆるからは、お城はまだ〳〵落ちぬと見ゆるぞ。

と皆々喜ぶ。鐘の聲つゞいて聞ゆ。七之丞は夢見る人の如くに聞入る。

千太郎「さりとて此の小人數では、敵を蹴散しても歸られまい。

源之助「慾ひ仕損じて、生擒なんどの恥辱に逢ふは殘念。

新七「このまゝ引返すは猶殘念ぢや。

萬次郎「こりや何としたものでござりませうな。

千太郎「むゝ。(と思案して)弓矢八幡は我々に歸るべき家を敎へた。

皆々「歸るとは……。

千太郎「土に歸るのぢや。

皆々「おゝ、切腹か。

と口々に云ふ。これにて、七之丞は夢の醒めたる如く、

七之丞「おゝ、好う云はれた。七之丞も他に思案は無い。此上はお城に向つて。

千太郎「殿樣にお暇乞。

皆々形を正しうして、城を望んで拜す。

千太郎「あの鐘の報知に依て。

源之助「お城は無事と聞くからは。

新七「われ〳〵死すとも憾は無い。

萬次郎「嬉しい事でござりました。

七之丞「一同笑うて死に就かうか。

下手より白虎隊の少年數人出で、

數人「や、あの火は。

七之丞「いや、騷ぐまい。お城は無事ぢやぞ。

丞「皆々自殺の準備す。

と背負ひたる銃など取下して、

道具は舊の辨天堂の前に戻りて、喇叭の聲聞ゆ。

前原彦次郎、赭熊の白毛を被り、筒袖の羽織、だん袋、大小、草鞋、遠眼鏡を持ちて出で、後より步兵數人、銃を持ちて出づ。

彦次郎「とう〳〵此處までは攻め付けたが、流石は會津ぢや、却々剛情に行る喃。

步兵「併し最う二三日の後には落城でござりませう。

彦次郎「いや、然う無雜作には行くまい。表面は鈍い樣に見えても、根氣の强いが東北人の長所ぢや。あの城で根かぎり防がれたら、早くも一月は掛らう。會津は十月に雪が降ると云へば、寒うならぬ中に、落したいものぢや。此の山に登れば、城は眼の下ぢやと

聞いて居つたが、こゝは思ふ樣でも無いな。

少兵「まだ此上に高地がございまする。

彦次郎「おゝ、左樣か。

と顧る時、上手の坂路よりお松泣きながら降り來る。

彦次郎「こりや、待て、待て。

お松「お前樣は誰だね。

と彦次郎を視て、

お松「錦切とやらぢやアねえかね。そんな人に用はねえ。

行きかゝれば、歩兵見咎めて、

少兵「や、お前の衣類には夥多しい血が着いて居るな。

彦次郎「それで呼び止めたのぢや。此山に怪我人でも居るのか。

お松「怪我人どころか、廿人も行儀好く列んで腹を切つてゐるだ。

彦次郎「何、廿人が腹を切つて居る。而て、それは會津の武士か。

お松「白虎隊の方々だよ。

彦次郎「白虎隊とは、今朝來戸の口の軍に、好う働いた會津の若者共ぢやな。それが此山で切腹したか。

お松「お城へは歸られねえ。と云つて、降參するのも逃げるのも嫌だと、お城の方へ向いて立派に腹を切つて了つた。

彦次郎「おゝ、さうであつたか。惜い者を殺した喃。東北の諸大名、一旦は順逆の方向を誤つて、錦旗に刄向う賊となつたが、其家來共に何の罪があらう。たゞ祖國の爲、主君の爲に、尊き命を捧げ、清き血を流したので、これが我國武士道の華ぢや。其の花にも似たる美少年が、一人ならず十人廿人、枕を駢べて義に死するとは、いづこの國にも例無き事、特り會津藩ばかりで無く、わが日本國の誇であらう。

少兵「誠に敵ながら天晴の者でございまするな。

彦次郎「いや、敵と云ひ、味方と云ふは一時の事で、天下定つた曉には、何れも朝廷の御家來となるのぢや。我々も曾て敵と呼ばれた。

と坐ろに昔を思ひ出でゝ、悵然。

彦次郎「五年以前、我々長州藩士は、佐幕黨の爲に苛う窘められたが、五年後の今日に至つては、我々が遂に最後の勝利者となつた。五年の月日は短いが、歴史は走馬燈の樣に移つて行く。いや、不思議なもの喃。

【幕】

明治四十一年九月三日印刷
明治四十一年九月十三日發行

維新前後
定價貳拾五錢

著作者　岡本綺堂
興行權所有者　東京日本橋區馬喰町三丁目十四番地　川上音二郎
發行者　東京市小石川區久堅町百八番地　瀧川民治郎
印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　山田英二
印刷所　博文館印刷所

發行所
東京日本橋區馬喰町　今古堂書店
大阪東區南渡邊町　杉本書店

無斷興行を禁ず
不許複製

欠

MISSING

今古堂發行書目

リットン卿原著 原抱一庵譯 安藤仲太郎畫 小說 **聖人か盜賊か** ●前編定價金四十錢 ●後編定價金四十五錢 ●郵稅各六錢宛

中村春雨著 鏑木清方畫 短篇小說 **角笛** ●定價金六十錢 ●郵稅金八錢

黑法師著 鏑木清方畫 家庭小說 **想夫憐** ●定價金四十五錢 ●郵稅金六錢

楓村居士著 鏑木清方畫 軍事小說 **橘英男** ●定價金四十五錢 ●郵稅金八錢

廣津柳浪著 鏑木清方畫 小說 **二筋道** ●前編定價金六十錢 ●後編定價金六十錢 ●郵稅各金八錢宛

德田秋聲著 鏑木清方畫 小說 **結婚難** ●定價金六十錢 ●郵稅金八錢

今古堂發行書目

リットン卿原著
原抱一庵譯
安藤仲太郎畫
小說
聖人か盜賊か
●前編定價金四十錢
●後編定價金十五錢
●郵稅各六錢宛

中村春雨著
鏑木清方畫
短篇小說
角笛
●定價金六十錢
●郵稅金八錢

黑法師著
鏑木清方畫
家庭小說
想夫憐
●定價金四十五錢
●郵稅金六錢

楓村居士著
鏑木清方畫
軍事小說
橘英男
●定價金四十五錢
●郵稅金八錢

廣津柳浪著
鏑木清方畫
小說
二筋道
●前編定價金六十錢
●後編定價金六十錢
●郵稅各金八錢宛

德田秋聲著
鏑木清方畫
小說
結婚難
●定價金六十錢
●郵稅金八錢

今古堂發行書目

橋本青雨著	江見水蔭著	廣津柳浪作	江見水蔭著	德田秋聲著	正宗白鳥著
鏑木清方畫	鏑木清方畫	和田英作畫	鏑木清方畫	波部審也畫	鏑木清方畫
戀愛小說	小說	小說	冒險小說	家庭小說	健全小說
愛の犧牲	**雲がくれ**	**橫戀慕**	**女船長**	**母の紀念**	**誰の罪業**
●定價金六十錢	●定價金六十錢	●前編定價六十五錢	●定價金五拾錢	●前編定價金六十五錢	●定價金五十錢
●郵稅金八錢	●郵稅金八錢	●後編定價六十五錢	●郵稅金八錢	●後編定價金六十五錢	●郵稅金八錢
		●郵稅各八錢宛		●郵稅各八錢宛	

今古堂發行書目

柳川春葉著	齋藤弔花著	塚原澁柿園著	德田秋聲著	江見水蔭著	柳川春葉著
波部審也口畫	鏑木清方畫	富田秋香畫	小峰大羽畫	鏑木清方畫	波部審也畫
家庭小說	理想小說	歷史小說	家庭小說	冒險小說	
新夫婦	**殘る光**	**天草一揆**	**落し胤**	**鹿島灘**	**心の影**
●前編定價金七十錢	●定價金六十五錢	●定價金六十五錢	●定價金六十五錢	●定價金七十錢	●定價金七十錢
●後編未刊	●郵稅金八錢	●郵稅金八錢	●郵稅金八錢	●郵稅金八錢	●郵稅金八錢
●郵稅金八錢宛					

今古堂發行書目

女の秘密	德田秋聲著 鏑木清方畫	●定價金六十五錢 ●郵稅金八錢	
讐	廣津柳浪著 和田英作畫	●前編定價金七十錢 ●後編定價金七十錢 ●郵稅金八錢	
新家庭	川上眉山著 岡田三郎助畫	●定價金七十五錢 ●郵稅金八錢	
焰	德田秋聲著 梶田半古畫	●前編定價金五十錢 ●後編定價金五十錢 ●郵稅金六錢	
春葉集	柳川春葉著 緒崎英朋畫	●定價金四十八錢 ●郵稅金六錢	
一枝の筆	大町桂月著	●定價金四十五錢 ●郵稅金六錢	

今古堂發行書目

閑日月	大町桂月著	●定價金四拾五錢 ●郵稅金六錢	
水中の結婚	江見水蔭著 鏑木清方畫	●定價金五拾錢 ●郵稅金八錢	
春怨	小栗風葉著 小峰大羽裝釘	●定價金七拾錢 ●郵稅金八錢	
炬火	中村春雨著 鏑木清方畫	●定價金壹圓 ●郵稅金十二錢	
犯さぬ罪	中村春雨著 鏑木清方畫	●近刊	
女の望	やなぎ生著 鏑木清方畫	●定價金八十錢 ●郵稅金八錢	

93
289

今古堂發行書目

廣津柳浪著 **心の火** ●近刊

鍋田晶山著 **紅涙** ●近刊

德田秋聲著 渡部審也著 **多數者** ●近刊

93
289

088823-000-0

93-289

維新前後

岡本　綺堂／著

M41

DBK-0006